

Record Geijutsu, Japan, 1998

There are so many pianists and composers who tried to arrange famous music pieces, for example, Bach, Chopin, Rachmaninoff, etc. Daniel Berman's CD was a result of his live concerts of 1992 & 1995. He was highly praised by Earl Wild. He is the first player (Debut) of some of Wild's transcriptions. In the Porgy & Bess Fantasy, because of the live concert, it sounds a little bit more soft and sensitive than Wild, but on the other hand his technique and expression has much more depth and expansion than Wild. When you are listening to his playing, we cannot help but be drawn to his playing like a magnet, more and more until the end. The Hungarian Rhapsody #19 and others also have the same effect. Berman's CD, which has Horowitz's and Wild's arrangements, gives the 20th Century pianism's one-of-the-best albums, and gives every indication there will be more to hear from him.

The Record Geigutsu

Music critic, Mr. Akira Takahira

海外盤試聴記



これはおすすすめ!

高久 暁
(音楽家)

編曲におけるピアノニズムの進化発展をさぐ

優れた編曲は一人の作曲家や演奏家が一代で作るものではない。話をピアノに絞るとして、『シャコンヌ』ならブゾーニ以前にブラームスやラフほかの編曲があり、多くの名ピアノニストや作曲家がバッハの編曲を手がけていた。ショパンのエチュードもゴドフスキが現われた前後に多数のピアノニストによって練習課題や編曲が作られた。必然的に後発の編曲は先行のものを批判的に受け継ぎ、その演出を洗練・進(深)化させないことには存在意義がなかった。今や編曲もののディスクでは、この世界の名所旧跡ばかりでなく、隠れた問題作や佳作にも光が当てられるようになり、編曲におけるピアノニズムの進化発展(あるいは逸脱?)の実態が耳から分かるようになってきた。

そんな一枚としてまず挙げたいのが、デンマークの中堅イェンセンが弾くイグナツ・フリードマンのバッハ編曲集。フリードマンは原曲の演奏や校訂楽譜にさえ過激な爪痕を残したが、編曲となると原曲に丰厚的響きや独特なメカニズム主に両手の重音パッセージと幅広い和音)や爛熟した和声をやり過ぎと思えるほど盛り込む。このディスクなら、一度として同じ対位句や和声が繰り返されない『カヴオット』(無伴奏ヴァイオリン・バルティータ第三番)がその典型。この曲はサン・サーンスやラフマニノフが編曲を手掛け、バルティータ・ロ短調の『ラレ』はゴドフスキが、コラル前奏曲はブゾーニが(幸は柔らかに草をはみ)ならグレインジャー『フライズ・ベルズ』、『トッカータとフーガ』二短調ならタウジヒなど十を下らぬ数の編曲がある。これらを聴き比べると、フリードマンの編曲の突出した表出

力や、他の誰の編曲よりもピアノ演奏そのものにこだわる音楽であるのが感得される。フリードマンは第一次世界大戦中にデンマークに逃れ、教育や演奏を通じてかの地のピアノ演奏水準を向上させた。イェンセンがかなりの難物を自然に弾きこなしている秘訣は、この大先達への敬意と共感にあるのだろうか。

フリードマン/バッハ編曲集
(ガヴォット、シチリアーナ、プーレ、ブランデンブルク協奏曲第3番第1楽章、ほか(全9曲))
ラルス・ホイエ・イェンセン(p)
[デンマーク・クラシコ] CLASSIC D190



バブストノバラフリーズ集(『マゼッパ』による幻想曲、『エフゲニー・オネーギン』による演奏会用バラフリーズ、ほか(全6曲))
オレグ・マルシェフ(p)
[デンマーク・ダナコード] DACC CD450



『ヴィルトゥオーゾ・ピアノ・レアリテーズ』(ショパン=バラキレフ・ロマンツェ(ピアノ協奏曲第1番第2楽章)、ほか(全6曲))
ダニエル・バーマン(p)
[デンマーク・ダナコード] DACC CD483



リガ出身のパーヴェル・バブスト(一八五四〜一九七〇)のバラフリーズ集は編曲ファンでなくとも要注目。経歴はあまり明らかではないが、兄のルイとともにロシアで教え、二人の門下からはリャブノフやイグムノフやゴリデンツェイセルを輩出。ロシア・ピアノ楽派の重要な一源流である。元曲は一曲を除いてチャイコフスキーで、リスト顔負けの繊細さと構成力で飽きさせない。しかし、バブストの編曲のピアノニズムが、編曲界では知られたグレインジャー(ルイの弟子)『花のワルツ』による演奏

マルシェフに限らずダナコードは優秀なピアノニストの宝庫だが、これはドイツ北辺の町ブーズムで行なわれる『レアリテーズ・オヴ・ピアノ』の演奏など、生であるのを差し引いても、ご本家よりよほど兵衛で練が細い。しかし実は技巧や表現力にきっちり蓄えがあり、ぐいぐいと最後まで聞かせる。『ロヴヴィツ』編の『ハンガリー狂詩曲』第19番ほかも同じ印象。バーマンのディスクは、ワイルドやホロヴィッツの編曲が、いくらか回顧的なながらも、二十世紀のピアノニズムの精髓が凝縮された名編として、作者の手から離れてゆくプロセスを指し示しているのだ。

力や、他の誰の編曲よりもピアノ演奏そのものにこだわる音楽であるのが感得される。フリードマンは第一次世界大戦中にデンマークに逃れ、教育や演奏を通じてかの地のピアノ演奏水準を向上させた。イェンセンがかなりの難物を自然に弾きこなしている秘訣は、この大先達への敬意と共感にあるのだろうか。

用用バラフリーズ』やラフマニノフ編『子守歌』に発展的に継承されているのが見逃せない。グレインジャーは『花のワルツ』をバブスト編眼の森の美女(参)を参考にしながら作ったのか、二曲とも和音で豪放な響きを作る際の弛の動かし方他にあまり例がない)がよく似ている。また、ラフマニノフ編の『子守歌』には、終わりの方に全音階階『ピアノ』のほぼ全音階を駆け上がりつつゆく効果満点のカデンツァがあるが、これは原曲に出発点バブストの編曲をファンタジーで移ったものと知れる。マルシェフはバブストから数えて五代目にあたる直系の弟子で、どんな箇所も決して荒みや力みを見せず、シユアな技巧で鮮やかに弾き抜いて頼もしい。

ノ・ミューシック、音楽祭のおかげである。ダナコードは毎年リリースする年度ごとの名曲集のほかに、出演頻度の多い演奏者についてアルバムを作り始めた。バーマンのものは九二年と九五年のライヴで構成。アール・ワイルドの信濃高橋、ワイルドの編曲のステーション初演を委ねられたこともあるバーマンだが、『ギギー』と『ベス』の歌にこの六訂正曲の演奏など、生であるのを差し引いても、ご本家よりよほど兵衛で練が細い。しかし実は技巧や表現力にきっちり蓄えがあり、ぐいぐいと最後まで聞かせる。『ロヴヴィツ』編の『ハンガリー狂詩曲』第19番ほかも同じ印象。バーマンのディスクは、ワイルドやホロヴィッツの編曲が、いくらか回顧的なながらも、二十世紀のピアノニズムの精髓が凝縮された名編として、作者の手から離れてゆくプロセスを指し示しているのだ。